

Title	学会という「知のプラットフォーム」で遠距離交際を
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	Wildlife Forum, 12(2): 2-2
Issue Date	2007-08
Type	Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16977
Rights	Copyright (C) 2007 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, Wildlife Forum, 12(2), 2007, pp.2-2. http://dx.doi.org/10.20798/wildlifeforum.12.2_2
Description	



学会という「知のプラットホーム」で 遠距離交際を



野生生物保護学会
会長 敷田 麻実
(北海道大学
観光学高等研究センター 教授)

身近な研究者仲間との密なコミュニケーションは、相互作用によって高いレベルの思考を生む。研究室のゼミや研究会の例を挙げるまでもなく、同じ分野に関心を持つ研究者同士が考えを主張しあうことで、創発されるからだ。こうした快適な「近所づきあい」が生む研究成果はすばらしい。研究の主流が個人戦（個人研究）から団体戦（共同研究）に移った現在、それはより顕著だろう。

しかしその一方で、同じ相手とのつきあいが続けば、発想は停滞し研究のダイナミズムが失われる。また、研究者が近所づきあいの快適さに安住すると、研究者の周囲の「トポロジー」が固定し、新たな発想は難しくなる。確かに居心地は良いのだが、最悪の場合には、個人がどうあがいても脱出できない停滞の隘路に追い込まれる。

こうした弊害を避けるにはどうしたらいいのだろうか。その答えの1つが学会への参加である。学会は、普段会うことのない研究者同士が出会う場、言うなれば近所づきあいを超えた「遠距離交際」ができる場である。

それは大学や研究所、親しいNPO仲間との近所づきあいで固定化した発想や設定を刷新するチャンスだ。学会でのちょっとした会話や発言から、研究者同士の「遠距離交際」が始まり、閉塞した研究環境のトポロジーを変えることになるだろう。新たに出会った研究者から得られる思わぬ知識が、ブレークスルーにつながることも多い。

野生生物保護学会の特徴である研究分野の多様性は、さまざまな知識の出会いを容易にする。本学会は、研究者同士の思わぬ出会いから始まる遠距離交際によって普段の近所づきあいで滞りがちな発想を、新たな創造に結びつける役割を果たしたい。それが本学会の目指している「知のプラットホーム」の実現である。

会員は、学会という知のプラットホームをダイナミックに活用した遠距離交際で、自分を取り巻く研究環境のトポロジーを変え、新たな知的飛躍を手にしよう。まずは11月の関東大会への参加を期待する。

注) ここで紹介した「仕組み」については、西口敏宏(2007)『遠距離交際と近所づきあい：成功する組織ネットワーク戦略』, NTT出版, 486p. に詳しい。

「今号の トビウロ問答」

Q トウキョウダルマガエル
が減っているようですが、
どうしてですか？

A トウキョウダルマガエル
は、昨年12月改訂の環境省
レッドリストで準絶滅危惧
種に指定されました。本来
関東地方から仙台平野にか
けての水田や湿地に普通に
いるカエルでしたが、水田
や湿地の減少や水田の圃場
整備の進行などによって激
減しています。

(写真や回答) 林 光武氏
栃木県立博物館主任研究員

